

女の子が男より10倍大  
きいかったよ世界

Terabeit

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

電車に轢かれるも、神様に転生させてもらえることになった主人公。童貞がいや男なら一度は夢見るであろうハーレムを作るために動くも、女の子が皆巨大だと知り絶望する。しかし優しい女の子に惹かれて再びハーレムを目指す話。

「前のタイトルが長すぎたため削りました。旧題：異世界でハーレムをくでも女の子が俺含めた男より10倍大きいので性転換能力あると百合ハーレムで妥協したくなりま

# 目次

異世界に行って大きい女の子を知って	
1	
初戦闘と初おんにゃのこ化	8
初おしごと(サイズフエチなしレズ回)	17
初冒険?と隔絶していく自分	23
ギルドでの一幕、登場!この世界の男	30
心が折れて、仕事が決まって	39
これからのこと	43



# 異世界に行つて大きい女の子を知つて

電車に轢かれて、この世界を抜けると、一面の暗闇だった。そこに光が降臨した。

「あなたは死にました」

全身から光を放つ清楚な風味でごまかしきれない痴女が降臨した。いろいろ見えそうなのに見えず、そして全く興奮しない。

「あなたはどちら様で」

「私は転生の女神、あなたの不慮を思い、ある世界に転生させてあげたいのです」

「いや、俺そんなに酷い死に方でしたか?」

「はい、宝くじの一等を見事あて、これから一生遊んで暮らすんだと、外出自粛要請が出され、たくさんの人が働きたくても働けない状況で、うつきうきの気分を下を見ず、通過列車に轢かれてたくさんの人に多大なご迷惑をかけ不名誉な死を遂げました。」

あれ、この神? 怒つてない?

「そんな大変かわいそうなあなたに、宝くじ一等分の財力の代替となる能力を差し上げ、異世界に転生させてあげようと思つております。」

「宝くじの一等つて10億円ですよ。そんな価値の能力が?」

「はい、人の世のお金など汚らわしく、なぜ人は天に与えられた価値ある命までさえ、お金を得るために使うのか、到底理解できませんが、

それほどの価値があり、以下の能力リストから10つ分の価値があると思っております。」

この神とやら、しれっと人を見下してない

リストにあったの能力は

- 一 超魔力 所属する分類の中で最高級の魔力を持つ
- 一 超処理 所属する分類の中で屈指の情報処理能力及び魔法行使能をもつ
- 一 超筋力 筋肉を改造し、通常の人の3倍の場力と4倍の耐久力をもつ
- 一 超体力 肝臓、腎臓、脂肪を改造し、強固な持続力を作り出す
- 一 超学習 レベルアップに必要な経験値が少なくなる
- 一 弱点克服 弱点による悪影響を最小限に留める
- 一 毒物耐性 毒物による悪影響をなくす
- 一 性転換 繁殖の機会が性別によって影響を受けない
- 一 粗悪耐性 粗悪な食料品であってもある程度の栄養補給が可能になる
- 一 低燃費 生命維持に必要な食料の量が減る
- 一 粗チン 相手を労わった交尾ができる

一 早漏 交尾に必要な時間を短縮する

12つの中からしか選べんのか。とうるか粗チンと早漏って実質デメリットじゃねか。実質それ以外の10つにするしかないじゃねえか。

実質選択肢ないやんけ。

「能力は選び終わりましたか？」

「二ついいか。なんでこんなに繁殖に関わる能力が多いんだ？」

「?生命の究極の目的は自身の種の存続と繁栄でしょ」

性選択学び直してこいとは思う。人間の一番モテるかどうかは美形かどうかだと思うんだが。まあいいか。

「えっと、粗チンと早漏以外の10つでお願いしまするま」

「わかりました。ではいつてらしゃい」

下ネタ無視された。

ゴトゴトゴトゴト!

なんの音だこれ。俺の下に路線らしき模様が、まさか

キー!

俺はまたしても轢かれたのであった。

「ステータスー」……………何も起きない

冷静に周りを見渡すと草原のようだ。少し行つたところに街らしきものがあつた。俺のハーレムライフは今始まるぜヒヤッホー。

なんとその街ぱつと見女性しかないのだ。これはハーレム間違いないしだ。

しかし近づけば近づくほど街が大きくなっていく。なのにまだ着かない。どうなつてゐるんだ。

やつと辿りついたと思つたら、遠目で腰くらいの高さの柵が俺の身長の5倍くらいの高さであつた。

すっげ高い。

柵を守る門番とかはいなかつたので門から普通に入るが、門も馬鹿みたいに大きい。ズシ、ズシ俺のすぐ後ろから音がして、慌てて下がり後ろを見ると肌色の2柱があり、俺の身長の5倍以上の長さがあつた。

巨大な柱の一本が消えたかのように見え、代わりに俺より大きな足裏が迫る。思いつきり踏まれた。苦しいが持ち堪えられないほどではない。

「うん、なんか踏んだ？え、なんで男がこの街の街道にいるのよ、全く」  
声が聞こえて、やつとこの柱が足だと気づく。

巨大な2柱は、俺の横をズシズシと通りすぎていった。あんなの足じゃやない。ただ

の柱だ。どれだけ肉付きがよくて、美曲線だとしても性の対象にはなりそうもなかった。

長すぎて2柱の付け根など見る余裕はなかった。その上位構造物などもつての他だ。なんとか土を払って立ち上がる。早々とハーレムの夢が音を立てて崩れていきそうだった。

「大丈夫、ですか？」

巨大な女が屈んでこちらを見据える。顔が見えるからか巨大であつてもちゃんと女として認識できた。ピンク色のロングでワンピースを着た美少女だ。優しい子みたいだ。

女と認識すると、とたんにいい匂いがしたり、スカートの中身が気になったりした。

「ああ、なんとか。」

「抱き抱えますよ、家で直してあげるの。」

巨大な手が迫る。1.5 m以上ありそうな手だ。正直少し怖い。ついに抱き抱えられる。

「男の人って女の子の赤ちゃんより小さいんですよ。なんで1人でいたんですか？」

その言葉が地味に刺さる。抱えられた時に当たったおっぱいはかなり大きい。どれだけ飲もうが枯れそうになさそうだ。

「つきました。少しこの机の上でじっとして下さい。回復呪文の杖持つてくるので。」  
そう言って机の上の上に置かれた俺。地面まで体感で3階建てくらいの高さはありそうだ。とても飛び降りる気なんて起きない。いくらチートで頑丈な体とはいえ、素の感覚が変わった訳じゃないのだ。

「ヒール」

大きな杖が当てられ、体の傷がなくなっていく。

「ありがとう」

「いえいえ、ところでこの街には何の用件で？」

「これだけ高い机の上のいでも未だに女の子の目線は上であつた。」

「俺、冒険者になって、強くなりたいんだ。そのために来た」

異世界での憧れを口にする。

「無理ですよ。男の子には女の子なら子供でも勝てるゴブリンに辛勝できるかできなからいですよ、それ以上なんて無理です。よくそんな無謀な夢もちますねえ」

「魔法さえあればどうにかなる！」

「そもそも男性に魔法は厳しいですよ。基礎魔法ですら処理能力も魔力もたりません。」

「そんな」

「回復した矢先に傷つけたくはないんですが、あなたが死なないために模擬戦してあげ

ましよう。ちゃんと後で回復させてあげます。全力でかかってきていいですよ。その机を降りられたらですが」

高いところから降りるのは怖い。でも目の前の子とイチャイチャしたい。大きなおっぱいに溺れたい。ハーレムを作りたいそんな欲望から机を降りて、恩人に対峙した。

## 初戦闘と初おんにやのこ化

やはり大きい。対峙してわかった。しかし俺にはチート能力があるはずだ。

「いきますよ。それ！」

巨大な足が持ち上がり、俺に直進してくる。なんとか右側に躲すも、直後に背後から衝撃が加わり、吹き飛ばされる。

しかし、そこまで痛くはない。体はしっかりと耐え切っている。振り返えると、目の前の女性は蹴りの動作に入っていた。

蹴りをくらっても痛くないことが分かってからは、少しでも冷静になれ、少しは余裕を持って、意識を集中して大きくジャンプする。

大きくジャンプすると女性の頭を超えて初めて女性を見下ろせた。そのまま女性の顔になんとかしがみつく。

「ちよと、何を、うわあ、」

そのまま女性は踏ん俺の飛びを殺しきれず、思いつきり地面に頭から叩きつけらる。俺も頭と一緒に叩きつけらるが、

女性の頭が緩衝剤となって、飛び跳ねずにすんだ。

「降参ですー、あなたそこそこやれるんですね。とりあえず頭からどいてください。」

「悪い」

すぐに頭から降りる。

「はあ、私に勝っても、もつと強い人は山ほどいるのですが、えつと机の上に乗ってもらえませんか、先ほどのジャンプで」

「おう」

まだコツが掴めていないため若干上に行きすぎてしまったが、なんとか飛び乗った。

「自己紹介がまだでしたね。私はメアリー、医者をやっております」

「俺はリヨウタ、ツチミリヨウタだ」

「そろそろお腹空いてきたので食べながら話しましょう、あなたも何か食べますか？分けてあげます、男性の食べる量なんてしれてますので、遠慮しなくていいですよ。」

メアリーさんが俺が中に余裕で入れそうなバスケットにパンを詰めてきた。

「どうぞで」

パン一個で俺くらいの大きさがある。苦勞しながらなんとか食べる。水は小皿に出して貰い、掬って飲む。

その間にメアリーさんは大きな口を開いてどんどん食べていく。

「少しお尋ねしますが、あなたはどこから来たのですか、ここら辺の名前ではなさそうで

すが、発音とかに違和は感じません」

「そういうや、俺が今話してるの元の国の言葉と違うな。神がそこら辺どうにかしたのだからか」

「わからない。俺は目が覚めたらこの近くにいてな。元の場所がどこか知らないんだ」

異世界といつても信じてもらえないだろうし、適当にはぐらかす

「そーいや聞いていいか」

「なんでしようか」

「俺が踏み潰された時、その人が『なんでここに男がいるんだよ』って言ってたがどういふことなんだ。ここに男は普通いないのか？」

「そうですね。男性はこの街ではギルドで共有管理して、子供を作るときにそこから男を派遣することになっていふのです。」

そのため町に男性がいることはほとんどありません。とはいえ行為後にはその男性は解放されるのです。そのため自由の男性は、

行為せずに逃げたものを除いて自由が与えられます。大概自活出来ず、ギルドに戻るのですか」

男にとつてデイストピアみたいだが、まあこの大きさだと生活できんし当たり前なのか。

「リョウタさんはどうしますか。ギルドに行つてそこで生活を委ねますか？」

「いや、俺は冒険者になりたいんだ」主にモテるために、というか他の手段ないし、異世界テンプレもあるし。

「そこまで想いがあるなら止めませんが、多分成れませんよ、というか元の地にも冒険者つてあつたんですね」

あ、破綻したかこれ。ヤバイぞ。考えろー、そうや

「ああ、本を読んだんだ。本は入つてきてたし」

「男の人にも読める本を作るなんて、不思議なところなのですな」

「そ、そうなんだよ」

「それでなんで冒険者に、」

「冒険者になると強くなれるつて、あつたからな」

悪戦苦闘してなんとか食べ終えた。食べた総量はメアリーの一口にも及ばなかった。余つた分はメアリーさんが2、3口でペロツと食べてしまった。

「やっぱり求めてるのは強さだけなんですか？確かに冒険者になると、というか職をもらうと自身を効率よく育てるカードを職によつてもらうんですよ。そのカードのことを指しているんですか？冒険者はオールマイティに取れるので、それですかね」

「多分そうだ。そのカードが欲しいんだ」

「ここにもスキルとかあったりするのかわつぱり。

「じゃあさつき蹴ってしまったことのお詫びとしてカード作ってあげましょう。もとより男の人がお金持つてるなんて思ってたので」

「本当にいいのか」

「はい、そのカード作るときに全身を調べてさせてもらいますが、大丈夫ですか?」

「もちろんだ」

「男性の体は調べたことが何なので少し緊張します。」

メアリーさんが俺を覆えそうな大きな手を向けてくる。手自体は俺から見てもキメ細かで美しく柔らかそうだ。

「しばらくじっとしててください」

15分くらいの間メアリーさんは右手でメモを取りながら、手を当て続けていた。唸っていたのが結構気になった。

「大体の状態は確認しました。ところでリョウタさん、何か封印に心当たりないですか。封印のようなものがかかっていたんですが、男性特有のものかもしれないのでご確認したいのですが、」

「ないと思うんですが、どういうものなんだ」

「封印自体は根が深くわからないのですが、表層部に栓のようにして出ているのです、明かに治しやすく、全体構造自体はわかりやすくなっているのです。呪いの類ではないとは思いますが」

呪いと封印の違いが分からない、その2つって似てるのかな

「わからないのか、処置とかできないのか？」

「どうなっても責任とれませんが、それでも処置しますか、明らかに治しやすくなっているので悪影響は少なさそうですが」

「頼んだ」

「了解です」

メアリーさんが大木と見間違うかのような杖をもってくる。

「行きますよー、それ」

何か、拘束が取れた気がする

「処置自体は完了です、何が起こるかはって、リョウタさん膨らんでません」

イタタタ、服がどんどん縮んでゆくようだ、体が大きくなっている気がする、体全体が張って、一気に膨張していき、服が破れた。

そして気づいたらメアリーさんが、というか周りのものが小さく、それこそ普通に暮らせそうなサイズになっていった。

そして体が大きくなった結果机の重心が傾き倒れてしまった。

「イテテ」体を床に打ち付けるも、ほとんど痛みはない、さっきのはリアクションである。それにしてもなんか声が高いような、

「リヨウタさん、女の子になってませんか！」メアリーさんの声が小さくなった気がする。

起き上がって、言われて下を見ると、おっぱいでお腹が見えなくなっていた。そして股間部の感触は無くなっていた。感触的に髪が肩にまでかかっているようだ。

「え、ほんとだ」

「と、と、とりあえず服持ってきます。」

俺は全裸の女になっていた。

ピンク髪の女性が服を持って入ってきた。俺よりも頭1個分くらい小さい。かなり可愛い。さらにおっぱい大きい。

「服持ってきましたけど、着れますかね？」

声でやつとメアリーさんと気づいた。とりあえず服をもらった、上はちよつときついが着れなくなかった。下はスカートだったので少し手間ってしまったが、なんとか着れたが、完全にミニスカ状態だ。

「リヨウタさん女の子だったんですね、驚きました、あの封印で男の人になっていったん

ですね」

「俺はこの部屋がこんな狭かったり、メアリーさんが小さくて驚いてるんだが、」

「ああ、確かにサイズ感は狂うかも、つと当初の目的である冒険者登録ですが女の子なら問題なくいけますよ、とはいえカードは有料なんです、私が作りましょう。ホントはよければ泊めてあげるつもりだったんですが、見てのとうりあんまり広くなく、女の子は泊められないので、ここ5、6日ぐらい過ごせるお金もあげますよ、リョウタさんお金持ってないみたいですし」

「ちよつとそこまでしてもらうのは悪い気がしてきたんだけど、」

「いいいえ、非戦闘員とはいえ女性とわたりあえる男性を調べさせてもらったので、これでも少ないくらいです」

それにしてもこのサイズだと本当に可愛いなあ。あれだけサイズ差あつてそう思っただけあつて、サイズ差ないといつそう感じる。

男性に戻らないのも手かもしれない。やっぱりサイズ差は馬鹿にならない。俺を踏んだあの子も今なら可愛いのかも。

「もう一回、じつとして下さい、男性女性で違う可能性があるのです、とはいえ女性は慣れてますのですぐ終わりますよ」

今回はものの1分かからなかったくらいだ。メアリーさんがカードらしきものを取

り出し、そこに何やら魔法をかけていく。

「はいどうぞ。そのカードをギルド、ここを出て大通りをまっすぐ行つたところの目立つ建物、で見せれば立派な冒険者です。」

宿はそこで紹介してもらつてください。リヨウタさんは本が読めるようなので、カードやギルドの説明についてはここに付しておきました。」

「何から何までありがとうございます」

カードと荷物を入れるリュックそして、紙を入れるファイルを貰つた。

「いえいえ、私は医者やつてますので、怪我や病気のときにはここに來てください」

「何か必ず恩返しにきます」そしてあわよくばあなたを手に入れますとは言わないが、落とせるといいな。

そういつて今度は抱き抱えられてではなく、文字通り自分の足で外に出て、石を踏んですぐにまたメアリーさんのお世話になった。

## 初おしごと（サイズフエチなしレズ回）

俺の冒険は今始まるのか？

門からメアリーさんの家まではおっぱいに埋まっていた覚えしかないのこの街を全く見てなかったが、木材の家がほとんどで、そこまで大きい街ではなさそうだ。さてギルドとやらに行くのでしょうか。多分チート能力で最初から驚かれて、モツテモテなんだろうなあ、と夢想したりする。

大通りに出てすぐの大きい家、つてあれか。市長の家って感じがするぞ、なんとなく。あれ、メアリーさんの家の方が大きいぞ。靴もらいに行つた時に聞いたことによると、ほとんどが薬物や道具などの、実験施設だったり倉庫だったりして、まともに暮らせるスペースは、俺が介抱してもらつた一室だけだそうだが。あの人無茶苦茶すごい人だったのかな。

男にとつたらとんでもない大きい門だったんだだろうなあ、と思いつつ、そこまで大きい扉を開ける。

周りを見渡すと十数個の長机とそばに椅子がありそこにちらほらと人がいて、反対側にはカウンターらしきスペースには人が1人、正面には掲示板らしきものがある。もち

ろん全員女性だ。登録ならカウンターだろうということでカウンターに行く。

カウンターの女性は化粧してない事務員と言った感じだ。もちろん施設の顔だけあつてか、容姿のランクは高い。おっぱいはそこそこ。

その人と目が合った。

「いらつしやいませ、ご用件をどうぞ」

「えっと、冒険者の登録お願いします。これカードです」

「わかりました、少々お待ち下さい。おやこのカード初登録ですね。本拠地ここです。いいでしょうか？」

本拠地とかギルドとか知らない、先にメアリーさんの説明書読んどきやよかった。

「えっと、はい」

「その様子を見るに冒険者のことよく知らずにカードだけ作ったようですね」

「えっとはいそうです」

「えっとカードが登録した職によって成長に指向性を与えるって話は作った時に聞きましたか？」

「はい」

「冒険者は生存性に特化しています。この生存性を使って危険が高い任務を遂行するのが冒険者です」

「えっとギルドっていうのは、」

「ギルドは街共有の掲示板管理者です。登録者全員の功績を管理する施設であって、人と人をつなぐところですよ。ギルドは冒険者の職登録を担当していますが、他に登録する施設がない時はギルドが担当するわけですね。他にも誰も登録してくれない新しい職ができたときにはとりあえずここが担当という形です。奴隷登録とか、娼婦とかもここが担当ですよ」

「奴隷とか娼婦って職なのかよ！」

「ありがとうございます」

「ちなみに職は更新できるので、とりあえず登録とかもありですよ。職登録じゃなく、個人登録だけってのもあります。個人登録するとギルドが仕事を案内できるようになります。個人登録自体は無料です。仲介料はとりますが。冒険者登録は有料ですよ」

「ええー、とりあえず個人登録だけで」

「わかりました。その場合カードは必要ありませんが、カードの情報があると功績がわかりになりますよ、カード情報をお使いになられますか？」

「俺が考えてたシステムよりよほど面倒臭いなこの世界の。テンプレどうりにはいかなのか。」

「お願いします」

「登録する名前はどうぞされますか」

「リヨウタで」

「リヨウタさんですね。おや、あなたに早速お仕事が来ていますね。夜に抱かれるお仕事です」

「ええー、それって娼婦！えっと依頼主は？」

「私です！」

「お前かい！」

「そういうのって、男女でするものでは？」

「リヨウタさん、どんなけ生娘なんですか！男性ってこれくらいのお大きさなんですよ」

親指と中指で大きさを示す、逆に言えば手で表せてしまうくらいのお大きさでしかないわけだ。

「正直男性が死なないように気をつけないといけないので、子作りの試練ですよ、男性との行為は。気持ちよくなるなら女性が基本ですよ」

分かってはいたがこの世界の男性の扱い酷すぎる。ハーレム本当に作れるのかあ「私と気持ちよくなりましょ！今ならお金までついてきますよー！」

耳元で囁かれて、髪とか頸とかの匂いが、顔もいいし体も悪くないし、

「は、はい」

気づけば承諾してしまっていた。

「今は誰もいません、さあ今、ヤリにいきましょう」

「まだ昼だが、仕事もあるだろ！」口調が乱れてしまう。

「やりたいときにヤルべきです。代役なんていくらでもいますからね」

上目遣いの彼女のおっぱいが俺のおっぱいを押し上げて、それで、

「さあいきましよう」

思考停止してしまった

「おはよう、もう朝だよ。昨日はすごかったね、私もくたくただだよ」

知らない天井で、サラ（昨日やった受付のお姉さん）に起こされる。

R18にならないために、とか思いついたのが恥ずかしいので、行為シーンは全カットだ。ただかなり気持ちよかったとだけ伝えておく。

「いやあ、いい声で鳴いていたよねえ。でも私が一方的にせめてたら急に反撃されて華奢なのに力強いあなたにされるがままだったよ」

「またしようね、今度は私がずっと主導権もらうけどね。」

「やっぱりリョウタ娼婦むいてるのかなあ、でも私だけのものにしたらし、適正出すの悩むなあ」

「あ、これお金、冒険者やらないでもその感度と美貌があればお金くらいどうにでもなると思うよ」

「うー、もうあんな淫らなことは、」

「ふふ、気持ちよかつたくせに、」

「うー、言わないでくれー」

「ふふ、可愛い、さすがにもう一戦、は体力持ちそうにないしやめとくねえ」

俺、半日ぐらいやってたのにほとんど疲れてないんだが、これが超体力の恩恵なのか！こんなことに使うつもりはなかったが、

でもこの体なら何人も相手できそう、これは百合ハーレムでは、つとちよつと考えて違う、これはなんか違うと自分に言い聞かせるのであった。やつぱり最初から最後まで俺が主体がいいよね。俺は可愛がりたいんだ、可愛がれたいんじゃないとそう。

それにずっと女なのは釈だ。やはり男の体で、その力強さで屈服させたいと思うリョウタだった。

まあ女の方がよほど強そうなんだが、

## 初冒険？と隔絶していく自分

「今日はよろしくな！」

「こちらこそ、教えていただく立場ですのぞ」

季節は春の終わり、暖かくなってきた頃だが、長袖長ズボンで、リュック背負った人に挨拶と挨拶を交わす。

この人は採集を仕事としている人で、名前はデイジエ。今日はサラに紹介してもらって、お仕事体験だ。

「早速採取場に行くか、そこで指導してやるから」

「よろしくお願ひします」

ちゃんと俺も長袖長ズボンにしたぞ、仕事するなら大抵これで通じるってやつをサラに借りた。所謂作業着である。

「あれ、動物に乗って移動したりしないんですか？『馬』とか？」

「お前さんの言う『馬』が何か知らんが、そんな大きい動物なかないないしな、歩きが一番早い」

あれ、うまく翻訳されん言葉があつたぞ。そういえば『スマホ』も翻訳されないな。

いろいろ話しながら歩くこと体感で一時間。6 mくらいの木が並ぶ森についた。森自体はかなり広大だ。

「さて見てのとうりこの森に入るとほとんど光源がない。そこでだ、光源を自分で作るか、木を切り倒して光を差し込ませるかだな

普通はもともと適度に切り倒したところから行くんだが、今日は指導も兼ねてここにしたぞ。いざと言う時は自分で切り倒せんとやっつけていけないからな」

「まあと言つても適当に攻撃魔法使えりやそれでいいんだが」

「魔法つてどうやって使うんですか?」

「うーん、感覚でやるもんだからなあ、あたしはウラァーって感じで出すけど」

「デージェさんが叫ぶと同時に何かが出てきて木を燃やすが、何故かすぐ燃えるのに、燃え移りはしない不思議な光景だった。」

「竜が法則無視して炎吐いたりするがそんな感じでやってみよう。」

「まって、まって、最初は何もないとこでやるぞ」

「何故か方向変えさせられたがそのまま発射、黒い靄が直線を描き、直線下の草が消える。」

「おお、これぞ魔法いや魔砲か、もしかしてデージェが俺に夢中に

「何やってるんだ」「いてっ」俺は頭を叩かれた

「あー、私の教え方が悪かったのかもしれないが、お前、兵隊でも目指してるのか？」  
「え、どういう」

「破滅指向の魔力撒き散らしやがって、もし森に撃ったら採取場全滅だぞ、お前は魔法禁止だ。切り開くのはあたしがやるから、絶対にやるなよ」

「え、採取場全滅ってのは？」

「あー、魔法放つと、残った魔力が漂う訳だな。それが動植物にかなり影響するわけだ。さっきのはあたしでも感じ取れるぐらいのだけぞ、

植物とか大概の生物は死滅してしまうはずだ」

「まじですか」

「あたしらは強い上に生態系の外から入ってくるからな、ちよつとしたことが酷いことに繋がるんだ」

「そうなんですか、すみません」

「まあ、次いくぞ、取れる薬草とか教えるから、お前にもとって貰うぞ」

森に入っていく、足場はディージェさんが魔法で切り開いていくため意外と歩きやすい  
「おお、下見てみな、小さな木があるだろ、その身は香辛料に使える、葉の形とか覚えとけよ」

「はい」

「そうやって俺たちは昼過ぎまで山菜やら薬草やらを取った。超体力のおかげかこれまたほとんど疲れてない。」

「いや、お前、割と物覚えいいみたいだな。機会があつたらまた行こうぜ」

「はいありがとうございますました」

結局イチャイチャ展開は全くなかったが、知識は増えた。体験なのだが少しお金も貰えた。

サラに報告に行く

「終わった、それで宿紹介してもらえないか?」

「私と一緒にベットでもいいのよ」

「いや、眠れなさそうなのでやめとく」

「宿ならここですべて大通り沿いにある派手な屋根のところがあるわ、まあ逆にいえばそこしかないけど、これ紹介状、持っていくと少しだけお得よ」

「ありがとう」

紹介状持つて大道りの、あれか、白い屋根はよく目立つ。

「リョウウタさんですね、何泊されますか?」

「とりあえず一泊で」

「かしこまりました。食事はついていないのでギルドの食堂をお使いください、生活用

水はあちらをお使いください」

ということで一泊取った。

部屋はベッドと鏡、机がある宿だった。

鏡に写った女の自分を始めてみる。肩口までの黒い髪と、可愛い童顔気味で、服を着ていてもわかるおっぱいの緑の作業着を着た女の子だ。自分という感じが全くしないのに納得してしまっている自分もいる。うーん

その日はメアリーさんに借りた服を着て寝た、いい加減服自分用の普段着買って、この服返さないとなあと思いつながら眠った。

ここはどこだ、地面が柔らかくて、暖かく、ゆったりと揺れる。

「起きた？」 頭上から女の子の声がする。

「おはよ、俺のふとももの寝心地はどうだ」若干ふざけた口調で問うてくる

やはりデカイ、柔いふともも上でなんとか胡座を搔いて上を向く、大きな胸の間から少しだけ顔が見える。どこかで見た顔だ

左下を見ると白い床で、俺の身長くらいの高さがある。ふとももだけでこの高さなのかよ。

正面を見ると鼠蹊部とその下に目がいつてしまう、何とはいはないが、うつすら生え

てた。

「ふふ乗ってみて」女の子がこちらに大きな手を伸ばしてくる。不安定で怖かったので乗らないことにした

「乗らないの?じゃあ掴むよ、えい」

大きな手が俺を捕まえる。かなり力強い。大きな顔が近づいてくる。顔が大きいだけあつて呼吸音まで聴こえてくる。

「これでおんなじ目線だあ、ところで男の俺よ、ハーレムいつ作るの?」

「え、お前つてまさか、女の俺か?」

「そうだ、先に女を抱いた方の俺だ、今日はハーレムを作るために女の練習をしてみよう。この体をどうにかして気持ちよくしてみろ」

「え、男にやられるとか嫌じゃないのか」

「あのなあ、小さすぎてそういう存在に全く見えんのだよ、サラの言っていたことが実感できざるぞ、男の小ささ感じると」

「俺は寝転がるから、どうにかして気持ちよくしてくれよ」

そう言つて寝転がるリョウコ(リョウタから文字つてつけた、女の俺だし)。

目が覚めた。あれが夢だったのだと気づく。鏡うい見てもそこにいるのはちよつと

顔色が良くなった俺（女の子状態）だった。

これはある登山家がある山に登った記録である。

山肌は滑りやすく柔らかい。山は急だが山頂はそこまで高くない。踏破の証に2つの山頂と草原を下ったところにある亀裂に旗を立てることにした。旗を立てると大音量が響き地震がおこり旗が取れてしまうので、何度か立てると、地震はおまさらなくなつていき、臨界状態に達していた。みごとに間欠泉は吹き荒れ山頂部を登ったところの原子炉がメルトダウンを起こしていた。送電ケーブルはグチャグチャでひどい有様だ。ついに地形が変わり始め俺は山から吹き飛ばされてしまった。もはや制御不能でありあった。俺はなんとか逃げ切ったかと思うと不思議な万力によつて亀裂に差し込まれてしまい、逃げる事はできない。亀裂は断層となつて広まり、湧き水が溢れていた。俺は死を覚悟したのであった。

日記はここで終わっている

## ギルドでの一幕、登場!この世界の男

男の視点で女の自分を見た夢、を見た割に、自分は変わっていない気がする。

結局同じ自分なんだと感じてしまった。

ただ無理にでも分けないと区切りがつかないので、これから女の時は一人称「私」にすることにした

口調はそのままだが。

何はともあれもう朝だ。今日はどこ行くのやら。荷物をまとめ、作業着に着替えてからギルドに行く。

今日はなんとサラが食事処にいた。

「リョウタ、今日はこのギルドで働いてみる? 割学べる事多いよ」

「今日1人休暇取ってるから、その代替要因としてね。私がここに居るのは、その関係よ」

「なるほど、じゃあ今日はここで働くか、ギルドって料理から看板娘までやっていったんだっとな」

「そういうサラ以外の受付見たことないな。原則役割固定なのかな」

サラが料理し終えるまで待つ。

「さて今日は料理と書類整理とかしてもらおうから」

「はい」

「そそ。あと、リョウタ生娘すぎるから、ちよūdい機会だし、男見せてあげよう」

サラは受付の後ろの扉に入る。職員の休憩室みたいだ。下着なんか脱いであつて少し恥ずかしくなる。

ヤっちゃつた後なので今更な気がするが。

サラは受付につながる机とは逆側の扉に入っていく。すると途端に明るく、広い空間に出る。

床は土で青天井、中庭のような場所らしい。そこに1／10サイズの団地のような建物並んでいる。

そこに小人がわらわらという状況だ。普通に服着てるし、話しもするみたいで、ただ男しかいないだけのようだ。

こんなデイストピアで暮らす男はどんな精神してるのやら。

女の子にとっては百合天国だけだ。

「私を見ても驚かないんだな」

「まあ、残飯をここに届けてる関係で毎日女の子に会ってるしね」

「ほら、この背の低いコップにつけて出すのよ」

男達にとつてみれば、そのコップは大釜の様だった。

「さて次は書類と格闘よ、基準はここの辺に書いてあるからそれ見てね、あ、書類読めるよね」

「見せて、これならできそうだ」

結局メアリーからもらった紙読まず仕舞いだな。

えつと仕事を登録している人のファイルに振り分けて、達成した仕事はファイルから抜いて、先頭の功績リストを更新すればいいみたいだ。

数の加え方は日本語で言うところの『正』みたい追加していくようだ。

功績のランクは仕事の難度と達成度を乗算してつと、

書類整理しててわかるが、冒険系とかほとんどない。

育児やら家事から、建設、果ては夜のお仕事まで対象のようである。

まずファイルを見て功績を更新、その後できそうな仕事を振り分けていく。

ダブルブックキングチケット用に受付の紙にも振り分けた仕事を書いてゆく。

そうやって仕事を続けるが地道な作業で面倒臭い。

なおいつも受付にサラがいるイメージしかないが、朝の仕事を受けるラッシュ以外はベルおいとくだけのようだ。

「そろそろお昼ね。食堂行くわよ」

私も書類は見飽きたため、体動かしたかったし、食事とりたかったところだ。

ここの食事処はメニューは選べず、量を選ぶだけなので、大量に作っては鍋ごと持っ  
ていき、その場でよそう方式なのだ。

量がいくらでも料金と同じであり、親子で分け合う姿もよく見る。

私はウエイトレス役だ。サラは前売りのチケツトを売り捌いている。

昨日の夜洗ったとはいえ、作業着で大丈夫なんだろうか、衛生的に。

今日のメニューはシチューと、パン。あ、鍋とパン尽きそうだ。

「パンと鍋追加お願いします」

「はいよー」

余っている分を新しいものに移し替えて、次もっていく。それを何周かして今日は終  
わった。

サラと私は調理班と一緒に遅めの昼食。

立ち仕事短い時間でも疲れる。調理班はこれから大量の皿洗いのようだ。お疲れ様  
だ。

今度は私が男に昼食を持って行くことになった。私がコップに残飯や水を移し、パン  
をちぎって置くと、

わらわらと人が出てきて配食し始める。そんな様子を見て昼過ぎの仕事に戻った。

昼過ぎからも書類仕事、そして夕食のウェイトレスとやって今日は終わりだ。

「どうだった、ギルドの仕事?」

「書類仕事はもう嫌だ」

「まあ書類仕事に関しては同意、でも受付で、可愛い子探すのはやめられないんだよね

まあ次は受付とかもやらせてあげるから、また受けてみてね」

「うう、まあ考えとく。あ、ギルドにカバンとか置いといていい?」

「どうせ明日もよるんでしょ。いいわよ。ヤリにでもいくの?」

「そんなんじゃない」

「人目が気になるなら裏口から出てもいいわよ。男飼ってるところの対面に扉あったでしょ。あそこから何部屋か一直線に抜けるといけるわ。行くときは男踏まないように段差より内側は入らないようにね」

「そういうのじゃないって、えっとお疲れ、」

「うん、お疲れ。私はもう少し仕事してるから」

「わかった」

私はこの世界の男の精神が知ってみたいので、あの小さな街に男として行くことにした。

男の時だと間違いなく扉開かないので少しだけ開けて男になる。服と靴は全てリュックの中に入れた。

女の子の時は数秒だったんだが、やはり時間がかかる。この段差つてこんなに大きかったつけど思った。

女の子の時はせいぜい60cmぐらいだったんだが。

「お前誰だ？女によって連れてこられないなんて」

俺が段差降るのを見ていた人が訪ねてくる。意外とでかいぞ。俺より頭一つ分くらい大きい。

「俺はここに来れば保護が受けられると聞いてここに来たんだ」

「確かにここは食事が与えられるし外敵は来ないがいつ連れ去られるか分からんところだ。」

運がよければ一生連れ去られないし、運が悪けりや成人前でも連れて行かれる。

そして戻ってきた奴はほとんどおらず、戻ってきたやつも口を破らない恐ろしいところだ。

まあ仲間としては歓迎するよルール守ればな。ルールは適当なやつに聞いてくれ

あと今配給やつてる。ここまつすぐいって左だ」

「ありがとう」

女の子の時は小人にしか見えなかったが意外とでかいなこの人。

町と言つていくくらいのは広さはある。昼近く以外太陽が見えないことと男しかいないこと以外普通だ。

配給とやらに行くことにした。

「おお、お前新人か。よかつたなまだ余ってるからお前さんにも分けてやるよ」

そう言つて配給担当らしき男に分けてもらった。具材が大きくて食べづらいが、悪くない。

やけに広い中央街道がありその左右には各個人の部屋が連なっている。

全で一階建てで、その連なつた棟が左右合わせて4棟あり、途中に奥に行けるよう通路があつた。

俺は空いているところの部屋をもらった。ディスプレイアの割にみんな優しい。何故だろうかと、もらった寝室で考える。

家具は全て固定されている。服も食事も貰えた。ここよりもっと自由な元の世帯よりよほど優しい。

女の子がいればここに住みたいと思うほどには。一日だけの歓迎だったのかもしれないが。

今もう夜だ。今日はここで過ごして、しばらく経ったら出るかと思つてい

ドシン！ドシン！

音が響く

「あー夜勤なんて、さっさと男選んで寝よ」

大きなサラの声が聞こえ起きてしまった。

「これでいいか」

俺の寝床が持ち上げられる。とんでもない荷重がかかる。そして扉のある壁が外され、

床が傾く

「さあ、さっさと出ておいで」

ベットの upper 布団などとともに俺は落ちて、柔らかい地面に乗る。

「お、出た出た」

どうやらサラの手のひらの上のようだ。そしてそのままサラは俺をオリに入れる。

「どうもありがとう」

若い女性の声が聞こえる。

「いえいえ、仕事ですのうで」

こちらはサラの声だ。

そしてそのままその女性にオリは受け渡されてしまった。

おお今日のも小さいねえ、じゃあ行こうか、子供できるといいなあ。  
そう言つて俺はお持ち帰りされてしまった。

版幕 イルカショー

ガラス越しに何か道具を背につけた2匹イルカが泳ぐ。今左右のはるか上空のピンク  
クの輪をくぐつて、大きな波を立てる。

次に片方のイルカはツボのようなものに飛び込み、ツボの中で一回転して一気に外に  
出る。

ツボに入ったりリングを潜るたびに水量が増加していく。ある地点でガラスが開き  
イルカの一匹がこつちに来た。

俺はイルカの道具に固定されてしまう。そしてそのままツボに何度も飛び込まさせ  
られる。

呼吸すら危うくなっていく中、飛び上がった瞬間になんとか息継ぎする。俺はいつ解  
放されるのだろうか？

## 心が折れて、仕事が決まって

俺はあの家から必死で逃げ出した。怖かった。今は早朝

快樂に染まった人間の底無し沼そういっただけを嫌というほど感じてしまった。

夢で味わった時は夢だったからであっただけで、現実となると話が違うわけだ。

コツは掴んでいるのですと、女体化はできた。全裸だが。

ギルドに行こうか？

いや昨日のことで、サラに会うのが怖い。また連れて行かれそうで、

いや、女の子状態では彼女のベットに連れて行かれけど、

となると、メアリーさんのところか？

他にこの世界の知人はおらず、それに、男性状態でも心配してくれたし、

あのおっぱいなら、安らげるし、

本当は、行動は脊髓反射的であった。理由は後付けだ。

全裸で歩くのは寒く、靴はないが意外と平気だ。

もう朝になって人々がもう家から出始めている。

と、メアリーの家の前に来たところで、どんなことを話そうか考えてなかった  
うーんええい、ままよ

扉を開ける。扉自体は開いたもののメアリーさんがいないな。

「おーい、メアリーさん？いないのかな」

なんかベル見たいのが置いてあるので、これを押せばいいのか

チーン

裸でしばらく待つと、メアリーさんが出てきた。若干いやかなり眠そうだ。

「うわあー、リョウタさんじゃないですか、どうして裸で？」

ピンクの髪にを後ろで結んだ作業服のようで、新鮮だ。普通に可愛い服の方が好きだが、

「えっと、とりあえず中に入れてもらっていいですか」

「あ、すみません、どうぞ中へ、何か着るもの持ってきますね、それまでの間はあそこのお布団かぶって下さい」

またメアリーさんの迷惑になってしまった。この布団、メアリーさんの匂いがする。気持ちいい

「もつってきましたよ。裸で私のところに来た理由を伺ってもいいでしょうか？」

「えっと実は…」

俺はメアリーさんにギルドでのあれこれや、男性の街に行ったら知らない女の人にお持ち帰りされたこと、

そこで受けたことなどを話していたら、とたんに涙がはじめてしまった。

「うーう、私もきつとあんな風になっちゃうんだと、思うと、つらくて、」

「大変だったんですね、あまりに衝撃的な光景に過剰反応しちゃっただけですよ、きつと」

メアリーが、私の頭をその大きな胸に持つていつて、頭を撫でてくれる。

でも涙は止まらない、でもいつまでも私が泣き終わるまで撫でてくれていた。

「どうですか、少しは楽になりましたか？涙には浄化作用があるんですよ」

「ありがとうございます。ご迷惑かけました、私はこれで…」

「待つてください、リョウタさん、仕事探ししているんですよ、今日はここで働いてみませんか？」

「えっ、」

「荷物については私が取ってきてあげますよ。ギルドでサラさんの声を聞くと、男性の時の光景が蘇ってしまうかもしれません、今日はここにいて下さい」

「その、悪いのでは、」

「それにお喋りできる同業は欲しいですからね、一緒に医者やりませんか」

「やりたいです」

「わざわざかしこまったり遠慮しなくていいですよ。私は最初から遠慮してませんので」

「それはどういう」

「私が最初あなたに声をかけたのはあなたの女性に踏まれても耐えられる体に興味があっただけです」

「えっ、」

「でも、縁はなんであれ、私に泣きついてきたあなたが愛おしく感じちゃってます。母性本能というやつですかね、あなたと一緒に働きたいってのは本心ですよ」

必死に私を安心させようとしてくれているのが伝わる。さっきの涙で吹っ切れたのかメアリーのゆりかごで癒されたのか、少し前向きになれた気がする

「あの、…ありがとうメアリー、そして今日は、いや友人としては、仲間としてもかもしれないけど明日も明後日もよろしく」

ちよつと照れ臭いが、少し口調を崩す

「はい、よろしくお願ひします」

## これからのこと

主人公が安住しちやっただので本編としては今回が最後です。これ以降は番外編ということで不定期更新になります

「さて、医者は補助をするにも何にしても、大量の知識が必要です。初心者でも出来そうなことがほとんどないんです」

「ということで、医者職の職取ってみては如何でしょうか？カードでやるのが最短です」

「カードに職登録できるんだっただけ」

「そうですね、登録用の機材はここにありません」

「じゃあお願いします」

「はい、カード今ありますか」

「あ、ギルドの鞆に服と一緒に」

「そうでしたね、丸裸でここに来てましたね。とりあえずこの業界の基本か。それがな

いとそもそも本読めないの」

「これが本当の基礎中の基礎の本です。私が荷物とか取ってくるのでそれ読んで下さい」

い」

基礎中の基礎なのに物凄い厚さだ。

パラパラとめくってみたが、限界まで分解してしまえば、魔力とやらも化学になってしまっているようで、その表記法がずらずらと書いてある。記法理解のための掴みだけ紹介すると書いてあるが、それでもこの厚さになってしまうのは仕方がないのだろう。何せ記法や言語を説明することは、その概念を説明しなければならぬ。何が起きているかを理解するための概念は分厚い

しかしメアリーと一緒にいたいという思いは、それがもうあの恐怖はないとの安心を失いたくないという思いを含むといえども本物、しっかりと読まなければ。

数十分くらい経った頃だろうか

「荷物取ってきましたよ、あとその渡してくれた人からの伝言で、『悩んでいるなら話して、私は待つてる』とのことですよ」

「ありがとう、そうだな」

「じゃあ、職登録やつちやいましょう、今リョウタさんが読んでる本の最初のページにこのカードを挟んでください」

言われたとうりカードを受け取って本の最初のページに挟む。

「挟んだらしばらく放置です」

「登録って、これだけなの」

「そうですよ。職業の基礎の本でもあり、職登録の魔道具でもあるんですよ。これは」  
「待ってる間に私の倉庫とか施設とか案内しますよ」

メアリーの施設はすごく、かなり大きな機材やら、精密な実験器具、そして治験用らしきたくさんさんの生物に、自動でエサや品質管理用の機械など、本当に様々なものがある。

「ざっとまあ、こんな感じですね」

「すごかった」

「もうそろそろ、登録終わってると思いますよ」

本を開けて、カードを取り出す。カードに触れると何かが浮かび上がる。そこにあつたのはテストやら参考書やらだった。

カードって単なる学習アプリなのかよ、とつつこまずにはいられない。

結局メアリーの仕事手伝うには学ばなければいけないので、今日は学習に集中、メアリーは自分のお仕事している。

いつか隣に立てる事を祈って学習に励む

「リョウタさん、ギルド、行ってみませんか、久しぶりに私もギルドの食事処に行きたいですし」

「え、まだ」

「大丈夫ですよ」

上目づかいで、背伸びして私の頭を撫でてくれた。劣情より安心が出てくるのは悲しむべきか嬉しく思うべきか

「あなたはここにいます、ね」

頭一つ小さい女の子に抱きつく情けない人になりながらギルドに向かう

「いらつしやい、てリヨウタ」

今日もサラは受付のようだ。サラの声がトラウマを誘発することはなかった。

「えっと、信じてもらえないかもしれないが、聞いて欲しい」

俺は昨日のことを素直に話した。

「そうだったの、今日私の部屋に来なさい、真の女を見せて、そしてあじあわせてあげる」

「そうだな、恐れなくていい、私はあれを操れるんだ」

「私、そういう話興味ないわけじゃないんですよ、私も混ぜてもらえませんか」

「え、」メアリーがそういうの興味あるとは知らなかった。

「おほん、リヨウタさん、食べにいきましょう」

強引に話題を変えるメアリー

「リヨウタ、あとメアリーもかな、今日の夜は全力で楽しませてもらうよ」

明日もこんな平穏な生活が続く、それでいい、それがいい